



頑張る“チカラ”を応援します。

2023年度
第14回

学生チャレンジ企画



応募期間 **4/25 (火) > 5/22 (月) 15:00** まで

応募方法や応募書類のダウンロードはこちらから
<http://gakuchalle.takushoku-u.ac.jp/>



応募資格 本学に在籍する学生(学部生、北短生、大学院生、別科生)のグループ・個人 採択件数 5件程度を予定 活動資金 30万円を上限に支給

趣旨 社会や地域への貢献、国際交流、ボランティアや大学での学びを活かした活動などを積極的に行う学生をサポートするものです。

企画内容 「趣旨」に基づき、「SDGsの達成すべき17の目標」の観点を取り入れて企画してください。

お問い合わせ先 広報室(文京キャンパス) TEL.03-3947-7160 E-Mail:gakuchalle@ofc.takushoku-u.ac.jp 主催: 広報部・学生部

人事担当者も注目! | 2021年度 チャレンジ大賞受賞「FWR」

「ガクチカ」で伝えた 「学チャレの活動」に 企業が興味津々

商学部 国際ビジネス学科 4年 鈴木 翔太さん
FWR (Food Waste Reduction)



FWRは「Food Waste Reduction」の略称で、「フードロス削減とエシカル消費の促進」をテーマに活動を行いました。具体的には、フードロス削減に取り組む飲食店に関する情報を、文京区民や在学学生に向けて発信し、賛同くださった方々に来店してもらおうというものです。コロナ禍のため協力店舗への取材が計画どおりに進まないなど、さまざまな困難にぶつかりましたが、最終的には「エシカルイーツ」という冊子を制作することができました。この活動を通して身についたコミュニケーション能力や交渉力は、4年生になりゼミナールでメンバーをまとめる際に活かすことができました。また、就職活動では、学生チャレンジ企画の制度を評価してくださる企業が多くあり、希望の物流会社に内定をいただくことができました。今後は、在学中に培ってきた力を発揮して、社会人として頑張りたいです。



2022年度
第13回

学生チャレンジ企画 実施報告書

頑張る“チカラ”を
応援します。



Contents

- P1 第13回を振り返って
- P2 2022年度(第13回)募集要項
- P3 プレゼンテーション審査
- P5 ボーダレスかるた交流!!
多文化交流プロジェクト (MEP×SDGs)
- P7 ビーチコーミング・ボランティア活動
オーシャンガーディアンズ
- P9 富士川町の魅力発見プロジェクト
～特産品開発と情報発信拠点開拓の観点から～
C3F (サークルスリーエフ)
- P11 脱!カルチャーギャップ!
～国際キャンパス1年生の挑戦～
CGRG (Culture Gap Reserch Group)
- P13 拓こう!繋ごう!食の未来!
サマースクールin子ども食堂
拓SHOKU堂2022
- P15 留学生サポートプロジェクト
国際防災支援チーム
- P17 成果報告発表会



【SDGsとは】持続可能な開発目標とは17のグローバル目標と169のターゲットから成る国連の持続可能な開発目標。2015年9月の国連総会で採択された「我々の世界を変革する:持続可能な開発のための2030アジェンダ」と題する成果文書で示された2030年に向けた具体的な行動指針。



2022年度 第13回

学生チャレンジ企画

講評

2022年度 第13回 学生チャレンジ企画を振り返って

学生チャレンジ企画実行委員長 **潜道 文子** (拓殖大学副学長/商学部教授)



長らくコロナ禍の影響が残る中、学生たちのチャレンジ活動は、昨年度と比べてかなり活発なものとなり、成果報告発表会では各チームの独創的な活動成果が報告されました。

今年度は、テーマを「ボーダーレス×SDGs」と定め、企画の募集を行いました。応募数は26件であり、昨年度と同様の結果となりました。本報告書では今年度採択された6企画の実施内容と成果、活動を終えての感想や反省点、審査員からのコメントなどを掲載しております。

卒業後、学生たちが社会人として組織へ十分に貢献し、かつ自分自身、満足できる仕事を行っていくためには、立ちふさがり困難に果敢に挑んでいくチャレンジ精神や、工夫してやり遂げる力が必要だと思います。さらに、周りの人々の力を借りたり、アドバイスを受けたりすることができる柔軟性や他者との関係構築能力も重要です。企画採択された6団体は、今回のプロ

ジェクトを通じて、これらの力の重要性に気づいたのではないのでしょうか。まさに、人間力が向上したのだと思います。

この報告書を手にしてくださった皆様におかれましては、これを機に新しいチャレンジや興味関心に取り組むきっかけとなりましたら幸いです。

本イベントも今年度で13回目となりました。学生チャレンジ企画実行委員会を中心に、毎年、プロジェクト遂行に伴って生じる課題点を抽出し、翌年には、より多くの学生たちが成長の機会を得られるイベントとするべく、検討を続けております。今後も、改善・改革を行って参りたいと存じます。

最後になりましたが、今年度も学生たちの企画を積極的に受け入れて下さった行政機関、企業、各種団体や地域活性化等に関わる方々には大変お世話になりました。この場を借りまして厚くお礼申し上げます。

過年度応募状況

回数	年度	応募件数	1次審査(書類選考)通過	2次審査(プレゼン選考)通過 採択企画	優秀企画			
					最優秀賞(チャレンジ大賞)	優秀賞(チャレンジ賞)	奨励賞	
第1回	2010年/平成22年	21	10	6				
第2回	2011年/平成23年	20	8	8				
第3回	2012年/平成24年	21	9	6				
第4回	2013年/平成25年	15	8	6				
第5回	2014年/平成26年	19	9	6				
第6回	2015年/平成27年	14	8	6				
第7回	2016年/平成28年	23	8	5	1	1		
第8回	2017年/平成29年	23	10	5	1	1		
第9回	2018年/平成30年	34	8	5	1	2	2	
第10回	2019年/令和元年	グループ部門	38	15	9	1	3	2
		個人部門	2	1	1			
		アイデア部門	52	20	20			
第11回	2020年/令和2年			新型コロナウイルス感染症の影響により中止				
第12回	2021年/令和3年	26	9	6	1	1	1	
第13回	2022年/令和4年	26	11	6	1	1	1	

2022年度(第13回)募集要項

趣 旨 社会や地域への貢献、国際交流、ボランティア、大学の活性化などにつながる活動を積極的に行う学生をサポートするものです。

目 的 問題解決力、コミュニケーション力、交渉力、予算管理力の向上を目的とする。

応募資格 本学に在籍する学生(学部生・大学院生・別科生)
※個人(1名)でも応募可能です。

テ ー マ 「ボーダーレス×SDGs」の視点から以下の3つのテーマより1つを選択し、企画してください。
①拓殖大学の学生として今、私たちがすべきこと
②大学活性化のための活動
③その他
※ボーダーからは国境、都市と地方など、「地理的境界」を連想しますが、LGBTQ、人種など「社会的境界」も意味します。ボーダーレスな社会(境界のない社会)を構築するため、「SDGsの達成すべき17の目標」から該当する目標を選択し、活動を行ってください。

- 活動条件**
- ①趣旨に添うことを前提とした活動であること
 - ②学業に支障を来さないこと
 - ③危険を伴う活動は避けること
 - ④活動期間中、中間報告のための取材(対面またはオンライン)を受けること
 - ⑤紅陵祭で展示とワークショップにより活動成果を発表すること(予定)
 - ⑥活動の成果と反省、活動資金の収支をまとめた実施報告書を提出すること
 - ⑦成果報告発表会で最終発表(対面またはオンライン)を行うこと
 - ⑧活動は三密を避け、オンラインを有効活用すること

採択件数 5件程度を予定

活動資金 企画書の内容に応じた所要経費の一部を、30万円を上限に活動資金として支給します。なお、活動資金は実施報告書にて会計報告し、精算を行います。計画が実行出来なかった場合には、活動資金の返金を求める場合があります。

応募期間 2022年4月25日(月)～ 5月25日(水) 13:00

募集方法 Takudai Portal、デジタルサイネージ、ホームページ、学内ポスターで告知

応募方法 所定の提出書類フォーム(Excel形式)をホームページからダウンロードし作成してください。提出前にセルフチェックを行った上、入力済みのエクセルデータを学生チャレンジ企画専用アドレス
(gakuchalle@ofc.takushoku-u.ac.jp)

へ送信してください。なお、送信の際件名に「学生チャレンジ企画応募 グループ名(個人の場合は氏名)」を入力して、メールの本文には代表者の所属学科または研究科、学年、氏名を記載してください。

選考方法 ◎第1次選考(実行委員による書類審査)
結果は、6月10日(金)に電話でお知らせします。
◎第2次選考(プレゼンテーション審査)
6月18日(土)に後藤新平・新渡戸稲造記念講堂で開催します。パワーポイント等を使った5分のプレゼンテーションを行って頂きます。なお新型コロナウイルスの感染状況によりオンライン開催となる場合があります。その際の審査は事前に収録した5分以内の動画で行います。当日はプレゼン後10分間の質疑応答を行います。

企画の実行 「活動条件」に基づき、スケジュールを立て計画的に実行します。
※採択された企画は12月10日(土)、文京キャンパスで行われる成果報告発表会でその成果を発表して頂きます。その際、実施報告書・取組状況・プレゼン発表を総合的に審査しチャレンジ大賞、チャレンジ賞、奨励賞を選考し、表彰します。

スケジュール

- 4月18日(月) —— 説明会(文京キャンパス)
- 4月21日(木) —— 説明会(八王子国際キャンパス)
- 4月25日(月) —— 募集開始
- 5月10日(火) —— 説明会(文京キャンパス)
- 5月12日(木) —— 説明会(八王子国際キャンパス)
- 5月25日(水) —— 募集締切 13:00
- 6月10日(金) —— 第1次選考結果を電話で連絡
- 6月17日(金) —— プレゼンテーション用動画提出締切 13:00
※ オンライン開催の場合
- 6月18日(土) —— 第2次選考(プレゼンテーション審査)
※ 状況によりオンラインで開催
- 6月20日(月) —— 選考結果(採択企画)を学生ポータルで発表
- 6月下旬 —— 活動研修会(両キャンパス)
- 6月～9月 —— 中間レポート
※ 取材を受けホームページに掲載する。
- 10月中旬 —— 紅陵祭での展示発表・ワークショップ/活動完結
- 10月31日(月) —— 「実施報告書」原稿提出締切
- 12月10日(土) —— 成果報告発表会・表彰式
- 3月中旬 —— 「実施報告書(冊子)」発行

※新型コロナウイルスの感染状況により内容やスケジュールが変更となる場合があります。

主催 広報部・学生部 広報室(文京キャンパス:A館1階) 電話:03-3947-7160 E-mail:gakuchalle@ofc.takushoku-u.ac.jp



プレゼンテーション審査

6月18日(土)・7月16日(土)文京キャンパスにおいて、一次選考を通過した11団体によるプレゼンテーション審査(2次審査)が行われました。各団体の思いが込められた企画提案は目を見張るものがあり、審査員からもチャレンジ性やテーマ性、主体性といった様々な視点から多くの質問が出され、白熱した展開となりました。

審査のポイント

- ① 学生主体となっているか
- ② オリジナリティがあり、魅力的であるか
- ③ 活動内容は実現可能か
- ④ 選択したSDGsのゴールと活動内容が合っているか
- ⑤ 予算計画が適正であるか



参加団体 ★は採択団体

★ ボーダレスかるた交流!!

多文化交流プロジェクト(MEP×SDGs)

かるた交流を通して、国際交流の楽しさを知ってもらいたい。

★ 富士川町の魅力発見プロジェクト

～特産品開発と情報発信拠点開拓の観点から～

C3F(サークルスリーエフ)

山梨県富士川町において、地方と都心、学部と学部、時間と場所を超える関係を築きたい。

団地タクシーを核とした多世代交流のためのデザイン支援 CDS(Community Design Supporters)

高齢者向けの電動アシスト付きペロタクシーの運行継続、および地域活性の支援をしたい。

拓大生のためのオンデマンド型ランチ 拓大e定食プロジェクト

ランチ難民の学生に、新しいお昼ご飯の選択肢を提供したい。

★ ビーチコーミング・ボランティア活動

オーシャンガーディアンズ

海洋プラスチックごみを減らし、海の豊かさを守りたい。

★ 脱!カルチャーギャップ!

～国際キャンパス1年生の挑戦～

CGRG(Culture Gap Reserch Group)

日本人学生と留学生の間にある、文化の違いによる誤解の解消と心理的な隔たりを緩和したい。

★ 留学生防災サポートプロジェクト

国際防災支援チーム

日本に住む外国人の災害に対する意識や知識を高めたい。

sustainableチョークを作ろう!

～diversityとは何か?を考える～

3年★色えんぴース

大学内の廃棄資源を再生し、大学に還元したい。

WAKE UP!!後コロナ学生生活へ、自主情報収集能力を育てよう。

TFC(takushoku friend communicate) クループ「中国留学生会と異文化交流同好会協働」

履修登録支援サポートや学内生活における問題を解決し、留学生のモチベーションを高めたい。

★ 拓こう!繋ごう!食の未来! サマースクールin子ども食堂!

拓SHOKU堂 2022

活動を通じて、時のボーダレス・食のボーダレス・生産者と消費者のボーダレスを実現したい。

眠っている服たちにもう一度活躍の場を 拓大洋服リサイクルチーム

まだ着られるのに捨てられてしまう服をゼロにし、環境破壊を少しでも和らげたい。



採択団体メンバー 一覧

多文化交流プロジェクト(MEP×SDGs)

工学部 デザイン学科	4年	飯塚 帆乃香	神奈川県 港北高等学校 出身
商学部 国際ビジネス学科	2年	浅川 愛梨(代表者)	福島県 会津高等学校 出身
商学部 国際ビジネス学科	2年	川 千裕	千葉県 植草学園大学附属高等学校 出身

オーシャンガーディアンズ

商学部 経営学科	4年	倉持 圭汰	埼玉県 大宮東高等学校 出身
商学部 経営学科	4年	中島 未由佳	東京都 武蔵野高等学校 出身
商学部 経営学科	4年	長谷川 由唯	埼玉県 浦和商業高等学校 出身
商学部 経営学科	4年	原田 真衣	東京都 鷺宮高等学校 出身
商学部 国際ビジネス学科	4年	山口 綾大	神奈川県 元石川高等学校 出身
商学部 経営学科	3年	佐藤 蒼真(代表者)	千葉県 拓大紅陵高等学校 出身
商学部 経営学科	3年	高橋 萌加	東京都 武蔵野高等学校 出身
商学部 経営学科	3年	吉田 一人	東京都 第四商業高等学校 出身

C3F(サークルスリーエフ)

工学部 デザイン学科	4年	鈴木 哲平(代表者)	大分県 玖珠美山高等学校 出身
工学部 デザイン学科	4年	関塚 壮大	埼玉県 大宮工業高等学校 出身
商学部 経営学科	3年	山田 唯花	東京都 拓殖大学第一高等学校 出身
商学部 経営学科	3年	吉田 美輝	東京都 拓殖大学第一高等学校 出身
国際学部 国際学科	3年	神田 梨那	埼玉県 筑波大学附属坂戸高等学校 出身
国際学部 国際学科	3年	松澤 奏太	東京都 鷺宮高等学校 出身
国際学部 国際学科	2年	猪瀬 さくら	福島県 会津若松ザベリオ学園高等学校 出身
国際学部 国際学科	2年	川上 比奈多	千葉県 市立船橋高等学校 出身
国際学部 国際学科	2年	木村 夏葵	埼玉県 細田学園高等学校 出身
国際学部 国際学科	2年	鈴木 勝斗	栃木県 黒磯南高等学校 出身
国際学部 国際学科	2年	背黒 水萌	神奈川県 上矢部高等学校 出身
国際学部 国際学科	2年	西 隼希	埼玉県 東京成徳大学深谷高等学校 出身
国際学部 国際学科	2年	前迫 文音	神奈川県 横浜女学院高等学校 出身
国際学部 国際学科	2年	真野 峻輔	東京都 立正大学付属立正高等学校 出身
国際学部 国際学科	2年	三上 拓琉	岩手県 岩泉高等学校 出身
国際学部 国際学科	2年	茂木 健斗	埼玉県 浦和高等学校 出身

CGRG(Culture Gap Reserch Group)

国際学部 国際学科	1年	大塚 慎也(代表者)	宮城県 仙台第一高等学校 出身
国際学部 国際学科	1年	杉山 莉子	高校卒業程度認定試験 出身
国際学部 国際学科	1年	城野 達哉	大阪府 星翔高等学校 出身
国際学部 国際学科	1年	平良 琉成	千葉県 クラーク記念国際高等学校 出身
商学部 会計学科	1年	高橋 尚平	北海道 札幌啓北商業高等学校 出身
国際学部 国際学科	1年	譚 健朗	東京都 東京観光専門学校 出身

拓SHOKU堂2022

国際学部 国際学科	3年	足立 美紅	大阪府 牧野高等学校 出身
国際学部 国際学科	3年	荒牧 賢輝	神奈川県 荏田高等学校 出身
国際学部 国際学科	3年	井上 里穂	東京都 成瀬高等学校 出身
国際学部 国際学科	3年	奥山 澁大	青森県 東奥学園高等学校 出身
国際学部 国際学科	3年	上條 敬介	東京都 八王子北高等学校 出身
国際学部 国際学科	3年	吳 美露	東京都 千駄ヶ谷日本語学院 出身
国際学部 国際学科	3年	齊藤 美空(代表者)	東京都 松が谷高等学校 出身
国際学部 国際学科	3年	張 岩	九州外国语学院 出身
国際学部 国際学科	3年	蓮見 咲良子	栃木県 桐生南(現 桐生清桜高等学校)高等学校 出身
国際学部 国際学科	3年	羽山 裕大	千葉県 拓殖大学紅陵高等学校 出身
国際学部 国際学科	3年	前北 文瑠	長野県 上田染谷丘高等学校 出身
国際学部 国際学科	3年	増井 思介	東京都 昭和第一高等学校 出身
国際学部 国際学科	3年	揚 天銘	静岡県 浜松日本語学院 出身
国際学部 国際学科	3年	古田 慎之助	茨城県 水海道第一高等学校 出身

国際防災支援チーム

外国語学部 国際日本語学科	3年	金 玟廷	外国の高等学校 出身
外国語学部 国際日本語学科	3年	喬 政	東京都 渋谷外国語専門学校 出身
外国語学部 国際日本語学科	3年	陳 淵	東京都 申豊国際学院 出身
外国語学部 国際日本語学科	3年	ハビト ヨナタン ニクス	東京都 九段日本文化研究所日本語学院 出身
外国語学部 国際日本語学科	3年	松田 大樹	富山県 能登谷山高等学校 出身
外国語学部 国際日本語学科	3年	村松 夢乃	埼玉県 川越高等学校 出身
外国語学部 国際日本語学科	3年	森 海結	大阪府 羽衣学園高等学校 出身
外国語学部 国際日本語学科	3年	山岸 友真(代表者)	埼玉県 不動岡高等学校 出身
外国語学部 国際日本語学科	3年	山本 莉々華	山梨県 駿台甲府高等学校 出身
外国語学部 国際日本語学科	3年	魯 昕麒	神奈川県 横浜国際教育学院 出身

プレゼン後の感想

最初にネタを入れて少し工夫してみたのですが、それに対して少し笑ってもらえたので緊張がほぐれました。

このチャレンジに向けて、どのような企画をやるのかを決めるのが一番大変でした。

かなり大変でした。質疑応答がとても緊張しました。

入学してから共に目標に向かって進んできた友人、応援や、協力をしてくださった先生方のおかげだと思い感謝しています。

プレゼンは緊張しました。直前までドキドキしました。

学チャレに出ることになってから、ゼミのみんなまで頑張ってきたので、今はホッとしています。

審査員のコメント

多文化交流プロジェクト(MEP×SDGs)

◎「かるた」という日本の文化と留学生を絡めた活動が興味深かったです。
◎発想がユニークだが、どれだけ魅力的なかるたを作られるのかがポイントになると思います。

CGRG(Culture Gap Reserch Group)

◎さまざまな人々と連携しようとする点良かったです。
◎SNSとフリーペーパーをうまく使い分けて、メンバーの皆さんたちも楽しめる企画にしてほしいです。

オーシャンガーディアンズ

◎企画が面白いので、活動自体が持続可能になるようなアイデアに繋がることにも期待したいです。
◎SDGsとして分かりやすい活動で、成果を測るという計画が良いです。

拓SHOKU堂2022

◎子ども食堂側としっかり調整、連携が取れており実現性が高いと評価しました。
◎企画の内容がよく練られており、ドキュメンタリー映画という出口も魅力的でした。

C3F(サークルスリーエフ)

◎学部を横断したチームで、それぞれの学びの特長を活かそうとしている点が良かったです。
◎プレゼン内容が充実していました。

国際防災支援チーム

◎大事な社会的課題だと思いますので、将来的には文京キャンパスにも情報発信・提供してほしいです。
◎5カ国の言語によるYouTube配信が意義深いです。



ボーダレスかるた交流!!

【団体名】 多文化交流プロジェクト (MEP×SDGs)

【代表者】 商学部 国際ビジネス学科 2年 浅川 愛梨

※ MEP : Multicultural Exchange Project

活動記録

- 6月22日 かるた内容募集ポスター作成
- 6月29日 八王子国際キャンパスにてポスター掲示開始
- 6月30日 文京キャンパスにてポスター掲示開始
- 7月1日 ポータルサイトにてかるた内容募集告知開始
- 8月1日 応募内容をもとにかるた内容作成
- 8月22日 文字札、絵札、箱のデザインの作成開始
- 9月8日 忠栄印刷株式会社へかるた原本を提出
- 9月20日 忠栄印刷株式会社からかるたのサンプルを受け取る
「ボーダレスかるた交流!!」参加者募集ポスター作成
- 9月24日 参加者募集ポスター掲示開始
- 10月6日 ポータルサイトにて参加者募集告知開始
- 10月7日 忠栄印刷株式会社よりかるた納品
- 10月14日 紅陵祭で「ボーダレスかるた交流!!」開催

活動の目的と目標

1.目的と背景

本活動は拓殖大学の学生を対象としています。新型コロナウイルス感染拡大により、拓殖大学特有の国際交流の機会が少なくなったと同時に、学生主体の活動も減少していると感じていました。そこで、かるた交流開催を通じて国際交流の機会を設け、学生生活を豊かにするためにこの活動を企画しました。かるたを取り入れた理由は、拓殖大学文京キャンパスに所在する文京区が競技かるたと非常にゆかりの深い、「かるたの街」であり、学生にも発信したいと考えたからです。

2.目標

国際交流の楽しさを体験し、企画開催後には、大学生活で留学生に自分から話しかけることを目標とします。また、かるたを通して拓殖大学の知識を増やし、その知識を友人などに共有するなどして、今後の学生生活に活かしてほしいです。

協力者と企画メンバーは、学生自らが主体的・能動的に行動、参加して企画を実現し、何事にも挑戦する意欲、企画力、統率力、指揮能力など、これから社会に出て活躍できるような能力を養います。

数値目標

- かるた内容募集アンケート回答数:60件
- 参加人数目標:30名
- かるた交流開催日:10月14日(金) ※紅陵祭期間中

活動実績の報告

1.学生アンケート

期間:6月27日(月)~7月30日(土)

学生を対象に拓殖大学や大学生生活に関するアンケートをポスター掲示、大学ポータルサイト、SNS、口頭伝達などを通して回答を募集しました。ポスターはすべて手書きで作成し、合計20枚完成させました。ポスター作成で工夫した点は手書きで独自性を出した点。手書きにすることにより、印刷されたポスターよりも目がとまるように工夫しました。周りからの反応では、「気合が入っている」、「応援したくなる」と好印象でした。ポスターは文京キャンパスに10枚、八王子国際キャンパスに10枚掲示。SNSでは、個人のInstagramや様々なLINEグループで告知をしました。

アンケート内容は、大学のイメージ、大学の良いところを尋ねるものです。アンケートの回答目標値は60件、実際に集まった数は43件でした。回答数が目標の60件に達しなかった反省点として、活動内容に興味のある学生しか回答を得られなかったということが挙げられます。アンケートに答えてくれた方へ何かメリットがあれば、より多くの学生からの回答が期待できたのではないかと考えます。

ポスターを学内に掲示する際、職員の方に協力してもらい、学内の様々な場所に掲示することができました。このような点から、広く人脈を築くことの大切さを実感しました。

2.かるたの内容作成

期間:8月1日(月)~8月20日(土)

学生アンケートをもとに、美術研究会の協力者と企画メンバーでかるた内容の案を出しました。検討する上での注意点は、①拓殖大学のことを知っている内容か②節度を欠く言葉が使用されていないか、の2点です。学生アンケートだけではかるた内容の作成に必要な情報が足りず、拓殖大学についての書籍から情報を得て、かるた内容の案を出しました。工夫した点として、かるたで交流をするためグループワークに適した内容をかるたに取り入れた点です。

3.文字札・絵札・箱の制作

期間:8月22日(月)~9月27日(火)

協力者と企画メンバーでかるた内容を振り分け、制作にあたりました。注意点は、①かるたの内容に沿った絵になっているか②過激な絵ではないか③質素な絵ではないか、の3点です。絵札は個性を尊重するため、様々な絵柄、方法で描かれています。

4.参加者募集告知

期間:9月30日(金)~10月14日(金)

告知方法はポスター掲示、大学ポータルサイト、SNS、口頭伝達です。ポスター作成では、学生ア

企画概要

コロナ禍により拓殖大学特有とも言える国際交流の機会が少なかった為、「かるたの街」である文京区からヒントを得て、国際交流および拓殖大学の活性化を目的としたオリジナルかるたを製作し、紅陵祭で大会を実施した。製作にあたり、学生アンケートで集まった案をもとに拓殖大学の魅力や歴史について学べるかるたを検討。絵札は美術研究会、文字札は書道研究会が、印刷は卒業生が関わる印刷会社で環境に配慮した紙を用いて完成に至った。かるた大会では紅陵祭来場者の他、留学生や教職員など、様々な方が一緒になって盛会裡に終ることができた。

活動成果

1.反省点

学生アンケート、かるた交流参加募集を行う際、ポスター掲示だけではなく学生に直接チラシを配り、活動を広めていければアンケートや参加者募集を増やすことができたのではないかと反省しています。

2.活動を通しての気づき、身についた力

「拓殖大学とSDGsを組み合わせてかるたを製作することができた。」と参加者から感想をいただきました。また、かるたは対面だからこそ盛り上がりえるコンテンツであるということに気づきました。

大学ポータルサイトからの参加者申込件数は11名でしたが、最終的な参加人数は30名。「目標の30名を達成させ、絶対に企画を成功させる」という思いから、開催当日にチラシ配りや口頭伝達を行い目標人数を達成できました。この経験

から最後まで熱い気持ちで企画に取り組む姿勢、問題解決しようとする行動力が身につきました。また、私たちの企画に対する熱い思いが参加者を通じて、本気で楽しもうとしてくれる姿が見られました。成功には企画者の最後までしっかりやり抜こうとする気持ちが大切だと気づきました。

また、周りと連携しながら協力する力が身につく、美術研究会とメンバーでそれぞれの得意分野を生かしながら、役割をきっちり決めることで順調にかるたを完成させることができました。

先を見通して計画を立てる力、約5か月間計画通りに実行することができ、忍耐力や実行力が身につく、併せて、先を見通して計画を立てることの大切さを知りました。ゴールから日数を逆算して余裕をもたせて計画を立てると、急な変更にも対応できることも学びました。

3.最後に

「ボーダレスかるた交流!!」を企画するにあたり、何もかもが初めての試みでした。「かるたを本当に完成させることができるのか」、「参加者が集まらなかったらどうしよう」など不安な気持ちの中、周りの皆様の応援やサポートや、「頑張れ!」「応援してる!」といった声が、私たちの心の支えになり最後まで企画をやり通すことができました。活動に参加してくれた方、私たちと一緒にかるたを製作してくれた企業様と、美術研究会、私たちの活動を見守ってくださった皆様に、心より感謝申し上げます。



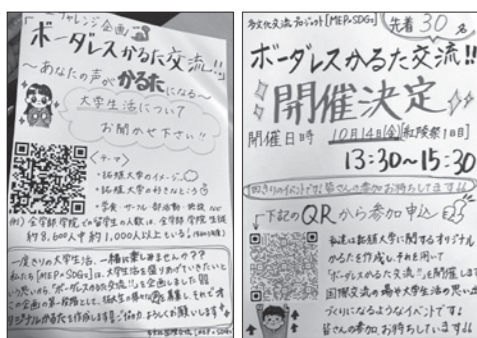
かるた交流参加者集合写真

会計報告

活動資金	71,150円	支出総額	58,351円
内訳			
	項目		小計
①	ポスター製作用消耗品		7,249円
②	かるた製作に伴う印刷費		40,000円
③	かるた製作に伴う雑費		2,145円
④	かるた交流に伴う消耗品		8,957円
	合計		58,351円

▶ ホームページ掲載

- 実施企画書 <http://gakuchalle.takushoku-u.ac.jp/2022/kikakusho.html>
- 学チャレレポート <http://gakuchalle.takushoku-u.ac.jp/2022/repo2.html>



かるた内容募集ポスター かるた交流参加者募集のポスター



かるた交流中の浅川と川



完成したかるたの箱、札



かるた内容募集のポスター作成の様子



文字札



絵札



かるた交流中、パワーポイントを用いた説明



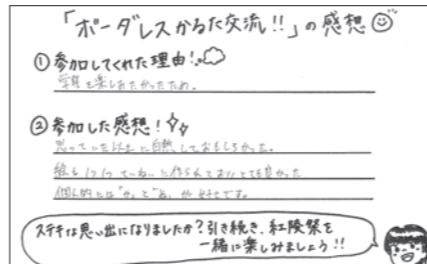
かるた内容を作成するために、拓殖大学に関する本からネタを探している川



左から川、加藤様(忠栄印刷会社)、浅川



かるた「そ」の文字札と絵札



交流後のアンケート

ビーチコーミング・ボランティア活動

【団体名】 オーシャンガーディアンズ

【代表者】 商学部 経営学科 3年 佐藤 蒼真

活動記録

- 5月30日 Instagram開設(アカウント名: @tu.oceanguardians)
- 7月9日 かながわ美化財団へ活動のサポート(ゴミ袋提供・回収)依頼
- 7月11日 清掃時に使用する備品購入
- 7月18日 ビーチコーミング・ボランティア活動1回目(由比ヶ浜)
- 8月15日 ビーチコーミング・ボランティア活動2回目(稲毛海岸)
- 9月5日 ビーチコーミング・ボランティア活動3回目(稲毛海岸)
- 9月12日 アクセサリー作製に使用する材料購入
- 9月19日 アクセサリー・リーフレット・ポスターの制作開始
- 9月26日~ 紅陵祭に向けた準備・宣伝
- 10月1日 アクセサリー・リーフレット・ポスター完成
- 10月4~16日 紅陵祭にてアクセサリー販売&成果確認アンケート収集
- 10月18日 メルカリにてアクセサリー販売開始
- 10月28日 海の羽根募金へ寄付



ゴミ拾いの様子 海に浮かんでいたペットボトルごみ



作成したポスター&リーフレット

活動の目的と目標

世界中でSDGsに対する取り組みが行われている中で、私たちは学生に身近な「ゴミ問題」に着目し、「海をきれいにしたい。」「きれいな海をいつまでも守りたい。」という気持ちから活動を企画しました。

1.背景

今起きている海洋プラスチック問題について、ひとりでも多くの人に知ってもらうことです。そのために、由比ヶ浜や稲毛海岸といった関東近郊の海で月1回以上を目標にゴミ拾いを実施しました。落ちていたゴミやゴミ拾いの様子をInstagramにて公開することで多くの人に関心を持ってもらうことができると考えました。

2.目的

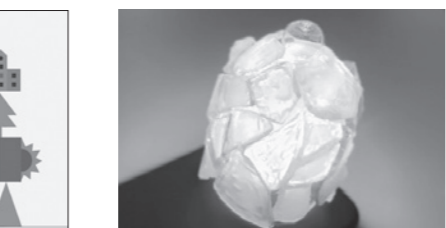
ゴミ拾いと同時にシーグラスを採取して、活用したアクセサリーを作製・販売することで普段、消費者である私たちが、つくる責任を体験できると考えました。そして実際に紅陵祭、メルカリにて販売しました。売上目標は3万円とし、売上金を全額、公益財団法人・海と渚環境美化・油濁対策機構の「海の羽根募金」に寄付することで海の保全に貢献します。また、紅陵祭では活動の成果を図るためにアンケートの実施やポスター掲示、リーフレット配布を行いました。



採取したシーグラス



シーグラスを使ったアクセサリー



ライトスタンド

活動実績の報告

1.ビーチコーミング

私たちは計3回ビーチコーミング・ボランティア活動を行いました。

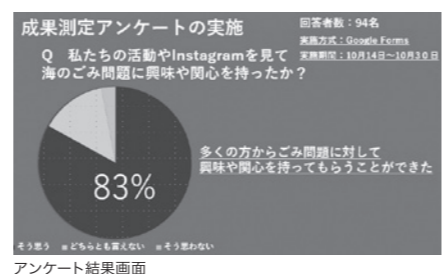
1回目のビーチコーミング・ボランティア活動は、7月18日(月・祝)に神奈川県由比ヶ浜で行いました。オーシャンガーディアンズのメンバーだけでなく、ゼミナールの学生にも声をかけて実施しました。遠くから海を見渡してみると、私たちが想像していたよりはきれいでした。しかし、浜辺を歩いてみると、マスクやペットボトル、タバコの吸殻、花火などが落ちていました。これらのゴミを実際に目にして、海に流れている現状を考えると、この問題はかなり深刻だと実感しました。アクセサリーになるシーグラスはほとんど落ちていませんでした。ゴミを拾う時はトンガや軍手を着用し、拾ったゴミはかながわ美化財団様に全て回収して頂きました。海の家で働く方から「ご苦労様です」、「ありがとう」と声をかけていただき、地域に貢献することができてよかったですと感じました。

2回目[8月15日(月)]と3回目[9月5日(月)]は、千葉県稲毛海岸にて少人数で実施しました。由比ヶ浜よりもきれいでゴミは多くありませんでした。また、小さなシーグラスがたくさん落ちていたので採取しました。

ゴミ拾いをするなかで天候やコロナウイルス感染拡大といった課題に直面しました。活動期間中は35度を超える猛烈な暑さや台風の接近、コロナウイルス感染者数の急激な増加等によって予定を立てることが難しく、活動を長時間行うことができませんでした。マスクや帽子的着用、水分補給の呼びかけ、2時間を超える活動はしないといった対策を講じた結果、屋外での活動中に体調を崩す人はいませんでした。

2.シーグラスアクセサリーの作製と販売

アクセサリーの作製はシーグラスがなかなか集まらなかったため、作製開始が当初の予定よりも1か月近く遅れました。また、シーグラスに穴をあけるルーターが壊れるといったハプニングも重なり、シーグラスはすぐに集めて完成できるだろうという自分たちの計画の甘さを痛感しました。実際にアクセサリーを作ってみて、ものを作る難しさや売れるためにはどんなデザインが良いのか、とても悩みました。おかげで想像以上に質の高いアクセサリーを



アンケート結果画面

企画概要

海洋プラスチックごみの問題をより多くの方に知ってもらうことを目的に、海の漂着物でアクセサリを作って販売し、NPO団体に売上金を寄付。この活動記録をSNS(Instagram)や紅陵祭等で発信し、問題に係る啓蒙活動を行った。アクセサリの素材はビーチクリーンの活動から採取したもので、夏季休暇期間中に複数回実施。作製したアクセサリは完売した。



紅陵祭の様子

作ることができ、完成した時の達成感は計り知れないものでした。そして、「つくる責任」を体感できたことは貴重な経験となりました。100個のアクセサリを1つ300円で販売する予定でしたが、少しでも多く海の保全に貢献したいという思いから、ネックレスやキーホルダーは500円、ライトスタンドは1,500円での販売を行う工夫をしました。またInstagramでは、ゴミ拾いを行った時の写真やアクセサリの宣伝、企業の取り組みなどを紹介し、多くの人に理解してもらえるように工夫しました。フォロワー数が100名を超え、たくさんの方に私たちの活動や問題について興味関心を示していただける発信ができたと思います。

3.紅陵祭での出展

紅陵祭当日はポスター掲示やリーフレット配布で私たちの活動も伝えながら販売を行いました。キーホルダーやネックレスは完売し、ピアスもあと1つで完売というところまで売ることができました。紅陵祭で売れ残ったアクセサリはメルカリで販売を行いました。アクセサリー販売の横に設置した募金箱には私たちの活動に幅広い年齢層の方から共感を頂き、3日間で1,000円以上の寄付が集まりました。後日、アクセサリー販売の売上金と合わせて公益財団法人・海と渚環境美化油濁対策機構様の「海の羽根募金」に寄付しました。目標であった3万円には及びませんでしたが、海の環境保護に貢献することができました。来場者やアクセサリの購入者、Instagramで活動成果を確認するためのアンケートを実施したところ、「ゴミ問題を知らない。」「知っていたけどゴミ拾いはしたことがない。」という回答と併せて「機会があればゴミ拾いやボランティア活動に参加したい。」という結果が得られました。多くの人にこのように感じてもらえたことが今回の活動における一番の成果だと思います。

活動成果

活動の反省点は、計画の見通しが甘かった点です。企画書の段階から変更が多く、当初はレジ袋削減のためにエコバッグ又はポーチをアクセサリ購入者に配付しようと考えていましたが、必要ないと判断して行いませんでした。また、シーグラスが採取できなかった場合どうするのかについても考えておらず、実際、100個アクセサリを販売する予定でしたが必要な数のシーグラスが集まりませんでした。これらの反省から計画性を持って行動すること、活動準備の大切さを学ぶことができました。

アクセサリー販売の売上3万円という目標に対して、募金を合わせて12,716円でした。目標は達成できませんでしたが、Instagramや紅陵祭でのアクセサリー販売を通して300名以上の方

(Instagramフォロワー100名以上、紅陵祭来場者数199名)に海の現状やゴミ問題について知ってもらうことができたと思います。

活動をして、地域やボランティアの方のおかげでゴミのないきれいな海や、私たちが安全に遊べる浜辺がある、ということをおぼろげに思い出していました。ごわずかですが私たちがゴミを拾うことで地域の方々に貢献できたと思います。また、ゴミのほとんどがペットボトルやマスクなどの、個人によって捨てられたゴミであるということに気づきました。リサイクルやエコバッグの持ち歩きや、レジ袋の有料化だけでなく、完全に廃止するといった「ゴミを出さない継続的な仕組み」を社会全体で考えていく必要があると感じました。

全ての活動を終えて身についたのは対応力と課題発見力です。コロナや異常気象といった活動の妨げになる問題が多くあった中で、対策を検討し対応することができました。また、現状から課題を解決していくために何が必要なのか明らかにすることができました。

海のゴミは一人ひとりが取り組まなければ解決できない問題であると改めて実感しました。オーシャンガーディアンズとしての活動が終了しても、ゴミ拾いやゴミの削減に率先して取り組んでいこうと思います。



メルカリ販売

Instagramフォロワー100名以上

会計報告

活動資金 40,000円		支出総額 37,767円	
内訳			
	項目	小計	
①	ポスター&リーフレット制作費	1,020円	
②	ビーチコーミングに係る用品費	11,759円	
③	ビーチコーミングに係る交通費	15,636円	
④	アクセサリー作製費	9,022円	
⑤	募金に伴う振込手数料	330円	
	合計	37,767円	
活動から得た収入「海と羽根募金」に全額寄付			
	紅陵祭 売上(3日間の総額)	11,600円	
	紅陵祭 募金(3日間の総額)	1,116円	
	合計	12,716円	

▶ ホームページ掲載

- 実施企画書 <http://gakuchalle.takushoku-u.ac.jp/2022/kikakusho.html>
- 学チャレレポート <http://gakuchalle.takushoku-u.ac.jp/2022/repo1.html>

富士川町の魅力発見プロジェクト

～特産品開発と情報発信拠点開拓の観点から～

【団体名】 C3F(サークルスリーエフ)

【代表者】 工学部 デザイン学科 4年 鈴木 哲平

活動記録

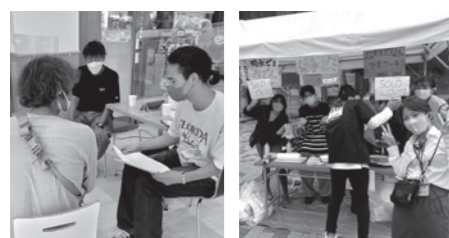
- 6月10日 マーケティング面やデザイン面を中心に商品開発を検討する
- 7月5・6日 道の駅富士川でのアンケート分析 現地の方と今後の展開確認
- 7月13日 1.パッケージの見直し(売り出し方に合わせたデザイン) 2.生産コストの見直し 3.商品自体の見直し(商品の売り出し方など)
- 7月17日 nocturne-candle(キャンドル教室)にアロマキャンドルの制作体験・見学に行く キャンドルの製作方法を学ぶ
- 8月15日 精良軒さんとパッケージと商品の検討、決定
- 8月24日 ゆずケーキパッケージ、商品名、価格設定、生産計画を決定
- 9月9日 キャンドルデザイナーの井上和弥氏にゆずキャンドル制作について相談(10月2日にも同様の活動)
- 9月25日 ゆずケーキ発注、春鶯囀チーム首掛けポップの製作
- 10月7・8日 富士川町シンポジウムに参加し試作品紹介および現地の方との意見交換
- 10月20日 反省会:活動内容をまとめ、ゆずケーキ、ゆずキャンドルの更なる改良を図る
- 10月13日 ゆずケーキの受け取り
- 10月14～16日 紅綾祭にてゆずケーキ販売



精良軒さんとゆずケーキについて打ち合わせ



富士川町の方が制作に協力



富士川町の方との打ち合わせ



紅綾祭では無事に完売

活動の目的と目標

「富士川町魅力発見プロジェクト」を通して富士川町の地域活性化のきっかけづくりを行います。チームを3つに分け、ゆずキャンドルチームは富士川町の特産品であるゆずを使用したキャンドル製作、ゆずケーキチームはパン屋精良軒と協力したゆずケーキの製作と販売。春鶯囀チームでは萬屋醸造店が手掛ける日本酒「春鶯囀」という銘柄の新商品を若者が日本酒に親しむきっかけづくりのために首掛けポップを制作します。

1. ゆずキャンドルチーム

目的 富士川町名産の「ゆず」に着目。廃棄されてしまうゆずを利用し、富士川町の魅力を発信するきっかけを作る。ゆずの特徴を生かした商品を開発します。

目標 廃棄されたゆずを使用したアロマキャンドルを製作します。そして、アロマキャンドルを利用した富士川町のPR活動を行い、観光客の増加に繋がります。

2. 春鶯囀チーム

目的 若者に日本酒への興味を持ってもらうことが目的です。近年若者の日本酒離れが拡大しており、春鶯囀の新商品の首掛けポップに着目しパッケージデザインという点から日本酒に興味を持ってもらいます。

目標 春鶯囀の新商品のラベルデザインは既に決定しているため、私たちの活動の目標は若者が注目するデザインの首掛けポップを制作することです。

3. ゆずケーキチーム

目的 富士川町の名産である「ゆず」を利用したゆずケーキの販売を促進し、富士川町の魅力を発信するきっかけを作る。

目標 道の駅45個、精良軒45個、春暁天25個、紅綾祭15個の計130個を10月に販売。



出来上がったゆずケーキ



試作したゆずキャンドル

活動実績の報告

1. 活動の進捗

ゆずキャンドルチーム 始めに八王子市にあるキャンドル教室にて、キャンドル作りの基礎を学びました。キャンドルを自分たちで作る、その過程でヒントになりそうな材料や注意点を講師の方に教わりました。

その後、山梨県富士川町に2度訪問し、富士川町在住のステージ装飾・イベント制作をしている井上和弥氏のもとを訪れ、ゆずキャンドルを製作。ゆずのエッセンシャルオイルを用いて、円柱型のキャンドルを作りました。パッケージやキャンドルはまだ試作品の段階で、学生チャレンジ企画の期間内では商品として完成させることはできませんでしたが、この完成への取り組みは国際学部徳永ゼミナールへ引き継ぐ予定です。

春鶯囀チーム 始めに日本酒に対する若者の現状、春鶯囀の商品の試飲した感想を20代前半の男女を中心としてアンケート調査(30名)を行いました。全体の約7割が週に1回以下の頻度でしか日本酒を飲まないという結果が分かり、新商品を試飲した約7割が高評価を示し、味の特徴も捉えてもらうことができました。次に若者に人気のお酒の市場調査を行い、人気になる要素には味などの内部的要因、パッケージデザインの外部的要因があることを把握しました。さらに若者に注目されているパッケージデザインのお酒をピックアップしその共通点を探しました。その結果から、カラフルな色使いや若者のイラストを使用し、シンプルなデザインに仕上げました。

ゆずケーキチーム 紅綾祭前日までに精良軒さんと密に情報交換を行い、具体的には「当日は何個売れるのか」また「1個当たりの単価はどうするか」などを話し合いました。

精良軒 (せいりょうけん)

大正7年創業の老舗パン、和菓子専門店。手作りのやさしい味が自慢で、富士川町産のフルーツなどを使ったパンと和菓子がショーケースに並び。

所在地/〒400-0501 山梨県南巨摩郡富士川町青柳町81
アクセス/ (車で) 中部横断道増穂ICから5分
(電車で) 増穂駅下車から約2.5km
営業時間/ 8:00～19:00 定休日/ 日曜日・祝日

春鶯囀 (しゅんのうてん)

萬屋醸造店が造る日本酒。萬屋醸造店は甲斐の銘醸として230余年(寛政2年創業)の歴史を刻む酒蔵で人の幸せにそと寄り添うお酒を造ることを理想にしており、主張し過ぎることはない、呑み飽きないお酒として、食を彩る。

※お酒は20歳になってから

所在地/〒400-0501 山梨県南巨摩郡富士川町青柳町1202-1
アクセス/ (車で) 中部横断自動車道増穂下車6分
(電車で) 市川大門駅から約3.0km
営業時間/ 10:00～12:00 13:00～16:00
定休日/ 火曜日・年末年始休業

企画概要

山梨県富士川町における、「余剰しているゆずを使用した商品開発」および「名産品の販売や情報発信拠点の整備」を目的に商学部、国際学部、工学部の学生が一つとなって各学部の専門性を活かし、若者が興味を持つ首掛けポップやラベルデザイン制作、ゆずキャンドル、ゆずケーキの発売案を展開。いずれも完成及び商品としての販売には至っていないが、各学部ゼミナール・研究室に引き継いで活動を続ける。

活動成果

1. ゆずキャンドルチーム

多角的視点から既存商品の分析を行い、既存のアイデアを重ね合わせ、斬新な発想を生み出す力が身につきました。最終的に試作品を数点完成させることができましたが、依然として課題は多い。再度身につけた力をもとに協力して進んでいきたいです。

目標の達成度 ゆずのエッセンシャルオイルを使用した試作品の段階では、キャンドル点火時の香りが弱く商品化には至りませんでした。

活動を実施しての意義 活動を実施して地域社会の促進につなげて、また富士川町のゆずを知るきっかけを作りました。

身についた力 ゆずキャンドルに関しての知識・技術的側面はもちろん、キャンドルチーム一人ひとりの主体性の向上を感じました。最初は奥手だったメンバーも現地訪問や試作会を重ねるにつれて発言する回数が増え、積極的な行動が初期に比べて増えました。

2. 春鶯囀チーム

アンケート調査や市場調査などを行い、課題解決への手順を探りながら、目標達成に対してアプローチをしました。最終的に若者が注目する首掛けポップを完成させることができたと感じています。

気づき 3学部共同で活動を行う中、複数の目標がある場合、各チームが達成に向けてアプローチをするのではなく、共に意見交換を行うことで

新しい視点が生まれ、課題解決に繋げやすいということを実感しました。

活動を実施しての意義 目的達成の過程にある、富士川町現地の方との意見交換や交流を重視した春鶯囀ブランドの確立です。

身についた力 現状調査やアンケート調査、市場調査を行い分析することで、物事を自分の視点だけでなく客観的に物事を見る力を身につけることができました。

3. ゆずケーキチーム

ケーキの開発が無事終わり、年内に販売することができました。生産者の方と意見交換を重ねて実際に購買会や紅綾祭での販売を通じ、学生・教職員の方々から好評の声を多数いただきました。この活動で物事の流れを把握し、実際に行動に起こす力を身につけることができました。



富士川町シンポジウムでの集合写真

会計報告

活動資金 154,000円 支出総額 127,204円

内 訳	
項 目	小 計
① 富士川町交通費	25,777円
② 上記ガソリン代	2,097円
③ キャンドル講座代(資料含む)	33,000円
④ ゆずキャンドル材料費	45,330円
⑤ ゆずケーキ購入費	21,000円
合計	127,204円
活動から得た収入	
紅綾祭ゆずケーキ売上 今後の商品開発に役立てて頂く為、全額精良軒様に寄付	34,700円
合計	34,700円

▶ ホームページ掲載

○実施企画書 <http://gakuchalle.takushoku-u.ac.jp/2022/kikakusho.html>

○学チャレレポート <http://gakuchalle.takushoku-u.ac.jp/2022/repo6.html>



春鶯囀首掛けポップの完成写真

脱!カルチャーギャップ!

～国際キャンパス1年生の挑戦～

【団体名】 CGRG (Culture Gap Reserch Group)

【代表者】 国際学部 国際学科 1年 大塚 慎也

活動記録

- 7月4日 簡易アンケート内容の検討
- 7月7~14日 各ゼミ教員への協力依頼/
簡易アンケートの印刷
- 7月15日 簡易アンケート実施(紙面配布)
- 7月16~20日 簡易アンケートの集計
- 7月29日 詳細アンケート内容の検討
~8月5日
- 9月1日 メールにて詳細アンケート実施
(Google Form利用)
- 9月2~21日 詳細アンケートの集計
- 9月23日 パンフレット掲載内容の検討
回答依頼作成/地域愛好会に連絡
- 9月26日 愛好会向け異文化パンフレット説明会実施
- 10月7日 異文化理解ディスカッション内容検討
異文化交流イベント内容検討/必要物品購入
- 10月14日 紅陵祭にて異文化交流イベント実施
異文化理解ディスカッション実施
- 10月20日 各愛好会にアンケート回答依頼/回収
- 10月27日 アンケート回答回収、予備日
- 10月21~30日 異文化理解パンフレット制作期間
- 10月31日 異文化理解パンフレット完成
ゼミナールや学生交流イベントにて随時配布



普段のミーティングの様子



海外に関するクイズの様子

活動の目的と目標

1.背景

春に入学してから感じた違和感、それは日本人学生と留学生との間に隔りがあるということ。両者の間にある「ボーダー」を取り払い、真の国際キャンパスとしてお互いの交流を深めたいという思いが、活動のきっかけとなりました。

2.目的と目標

異文化理解に関するアンケートを実施し、回答をもとにしたディスカッションやクイズなどのイベントを催してお互いの文化を受容する姿勢を養うことを企画の軸とし、集大成として異文化理解に役立つパンフレットを制作しました。

アンケートでは異文化理解の現状を知ることが目的に、目標回答率を90%に設定して実施。また紅陵祭では異文化を感じられるような企画を出展し、動員数100名を目標としました。企画内容はアンケート回答者の興味関心にもとづいた国について、ゲーム形式で学ぶイベントを検討。参加者の文化的課題に対して関心を持つ人を増やしていくのが狙いのひとつです。

3.展望

他学部を含めた学生、教職員など学内のさまざまな組織と協力することで異文化理解を深め、今後の拓大生に隔りを感じない学生生活を送ってもらうことを最終的な目標に掲げました。1年生としての新鮮な視点を大事にしながら半年間の活動を行いました。



カルチャーウルフの様子

活動実績の報告

1.アンケートの実施

国際学部1年生を対象とした簡易アンケートの実施から始めました。設問趣旨は「交流の難しさ」と「世界の国に対してのイメージ」、そして「異文化で特に興味のある分野」です。のちに企画するイベントや制作するパンフレットで活用するデータとなるため、なるべく多くの回答が得られる方法を検討しました。結果、クラスゼミナールの時間を利用して直接依頼することで、多くの回答を集めることができました。続いて内容を絞り、詳細なアンケートをGoogle Formで作成しました。記述も多く含まれたため、日本語のみでは留学生からの率直な意見が得にくいと考え、母国語で自由に意見を書いてもらえるよう中国語と英語に翻訳したアンケートも作成しました。期待通り、英語や中国語での生の声に近い回答を得ることができました。

2.イベント(紅陵祭)

紅陵祭では、来場者に異文化を感じていただけるようなブースづくりのアイデアをメンバー内で何度も話し合い、3つのブースを企画しました。その甲斐もあり、目標を超える113名の動員に加えて、活動をまとめたチラシ計180部を全て配りきるほどの盛況となりました。

クイズ アンケートの関心度をもとに国技(スポーツ)と観光地に関するクイズを出しました。この中で感じたことは、遠く離れた国ほど、その周辺地域全体として抽象的なイメージでのみ認識している人が多いということ。そして海外に行ったことがない方でも、写真の様子などから観光地に興味を持ち、コロナが収まったらクイズ問題の地域に行きたいと仰った方がいました。

海外のカードゲーム 海外のゲームはメキシコの伝統的なゲームであるロテリア(Loteria)を行いました。めくったカードの絵柄とマスの中に絵が描かれたシートの絵柄が一致することに印をつけ、タテ・ヨコ・ナナメをそろえる、というビンゴに似たゲームで、小さな子どもから大人まで楽しめるのが特徴です。

このゲームに熱中し、実際にネットで検索して買おうとしてくださった家族、「もう一回やりたい!」と言ってくれるお子さん、絵札を読んだ時のスペイン語を繰り返すことで言語に興味を持ってくださった方々など、たくさんの反響を得られました。なかでも留学について興味を示してくれた人もおり、ゲームを通してこんなに視野が広がるのだということを再認識しました。

カルチャーウルフ(派生ワードウルフ) カルチャーウルフは、配られたカード(ワード)のなかで少数派を当てるというゲーム「ワードウルフ」に似ており、お題を国名に変えたオリジナルゲームです。このゲームにあるお題(国名)について話し合い、その国の特徴やイメージについて新しい見

企画概要

日本人学生と留学生との間にあるボーダーを取り払い、海外に対する理解と興味を深めることを目的に、調査とイベントを実施。調査結果より「文化の違いによる誤解と心理的な隔たりを無くすこと」をテーマとした、ディスカッションやクイズイベントを紅陵祭で実施。麗澤会・愛好会団体所属学生も参加し、活動再開に向けた奮起の一助となった。これらの活動を冊子にまとめて、学内に配布したが、製本した60部を上回る印刷が必要なほどの盛況ぶり、1年生でも出来ることを証明できた。

方を発見してもらいたいと思い実施しました。

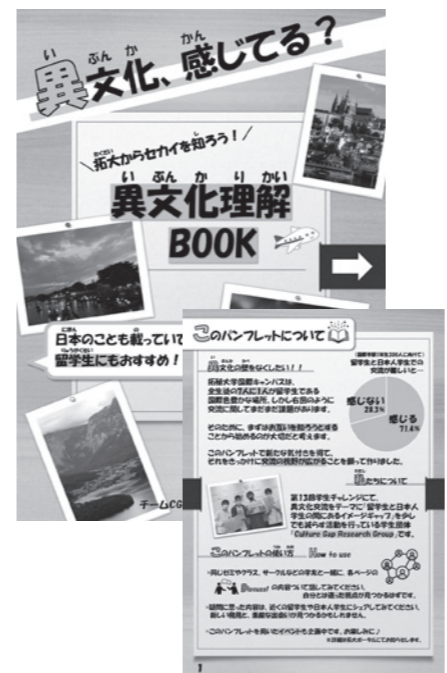
同じ国の中で食や気候に共通のイメージがあったものの、その程度(大小)の認識はばらばらである、と興味深い点がみられました。課題は、子どもやその国のイメージをつかめていない方にはハードルが高く難しかったことです。

異文化ディスカッション 異なる文化が交わる場を作りたいと思い、本学の地域研究サークルに所属する学生等で議論の場を設けました。コロナ禍で自粛していた多くのサークル団体は今後につながる各国の魅力発信について共有し、活動再開のきっかけとなり、他団体の活性化という点でも意義深い機会となりました。

3.異文化理解パンフレット制作

活動の成果を、集大成として一つのパンフレットにまとめました。本学の学生に向けて、様々な国の魅力を知ってもらいたいという願いから「異文化理解パンフレット」というタイトルで多彩なコンテンツを盛り込んでいます。ディスカッションの結論をもとに、読んだ方同士が話し合えるような構成となるようこだわりました。

今後、国際学部の各ゼミで議論の場を作るほか、他団体の交流活動にも活用したいと考えています。私たちが納得できるクオリティに仕上がったので、ぜひ下記のリンクから私たちの成果を見ていただくと嬉しいです。



活動成果

一番の成果は、この拓殖大学で同じような情熱をもって活動している様々な団体と関わることで、異文化交流における課題や解決の方向性が明確化したことにあります。異文化の受容にはまず「文化に触れる機会場のづくり」が必要であり、それをより多くの学生が関われる形で提供する必要性について相互に認識することが出来ました。

特に学生チャレンジ企画採択団体やオレンジプロジェクトのグループと今後の活動方針について、互いに良い影響を与えられたと思います。また、地域ボランティア愛好会は今回の「場をつくる」機会を共有したことにより活動を再開しようと決意されていました。コロナ禍で滞っていた「人と接する」形の交流がキャンパスで再び見られるようになるきっかけをつくることが出来たこと、大変誇りに思っています。



メキシコのゲーム(Loteria)の様子

また形に残る成果物として、「異文化理解パンフレット」を完成させることが出来ました。もとは60部の印刷を想定していましたが、教員からゼミ活動の一環として使いたいという要望を頂いたことで、パンフレットのもつ価値を再認識しました。工学部の学生や教員にも関わっていたので、自信を持って400部の印刷を行いました。今後、学内施設やイベントを通じて学生に配布したり、それを用いてさらに私たちがイベントなどの企画をしたり、様々な形で広めていきたいと考えます。

活動を通して、チームとしての今必要なことを簡潔に伝えるコミュニケーション力、そして他の学生団体や教職員の方と関わる際の協働方法が身につきました。データをまとめたり、パンフレットを自らの手で創り上げたりすることで、自然とExcelやPowerPointの活用方法もスキルとして習得することが出来ました。

最後に、私たちが同学年に与えた影響について。1年生に向けてアンケートを行った際、「学生チャレンジ企画」という活動自体を初めて知ったという人が多く、中には「もし自分の立場ならこういったアクションをしたい」ということを熱く語ってくれる方もいました。同学年が活動している姿を見て奮起する、という想定以上の反響を得ることができ、「1年生だからこそ」チャレンジするという私たちのスタンスが良かったと思っています。今後も様々な場で化学反応を起こせるよう、突き進んでいきます。

会計報告

活動資金	34,730円	支出総額	36,676円
内訳			
	項目		小計
①	コピー用紙(アンケート・紅陵祭チラシ印刷用)		4,262円
②	紅陵祭ブース用消耗品費(マグネット、カードケース)		1,320円
③	パンフレット印刷代		31,094円
	合計		36,676円

▶ ホームページ掲載

- 実施企画書 <http://gakuchalle.takushoku-u.ac.jp/2022/kikakusho.html>
- 学チャレレポート <http://gakuchalle.takushoku-u.ac.jp/2022/repo5.html>

拓こう!繋ごう!食の未来! サマースクールin子ども食堂

【団体名】拓SHOKU堂2022

【代表者】国際学部 国際学科 3年 齊藤 美空

活動記録

- 5月10・28日 子ども食堂カフェ北野で朝食ボランティア
- 6月7日 企画打合せ、タスクチーム分け
- 6月14日 イベント内容の決定
- 6月30日 子ども食堂カフェ北野にて朝食ボランティアおよびイベントの打ち合わせ
- 7月12日 八王子産玉ねぎの寄付(拓殖大学農園で作られたもの)。イベント準備
- 7月15日 子ども食堂カフェ北野スタッフとイベント日時決定(コロナウイルスによるイベント中止までのこの時点では、2022年8月16日・9月第2、第3土日開催予定でした)
- 7月19日 再打合せ(新型コロナウイルス感染拡大により、食事を伴わないイベントに内容変更)
- 8月13日 8月のイベント中止決定(9月に関して上旬の開催が見込めない、中心メンバーの体調不良者が多かったことからメンバー同士が対面で集まりイベント準備を行うことが難しいと判断)
- 8月20日 メンバー同士でのZoomを利用した話し合い。2つのイベント中止に伴い、BFC※プロジェクトの開催(食育に関する配信・ハッシュタグ企画)の検討・決定
- 9月1日 Zoomにて紅陵祭・10月開催予定のイベントの内容決め・話し合い
- 9月21日 八王子市 由井市民センターにて、イベントのリハーサル・BFCプロジェクトのインスタライブ配信撮影
- 9月27日 イベントの準備・打ち合わせ
- 9月29日 道の駅 八王子滝山にてイベント用野菜購入(八王子市の農家さん:生産者 石川 稔さん・関 純一さん)
- 10月1日 子ども食堂カフェ北野にて食育イベント開催、食堂スタッフにインタビュー・短編ドキュメンタリー撮影
- 10月3日 短編ドキュメンタリー編集・動画完成
- 10月8日 朝日教育会議2022にて活動紹介のプレゼンテーション
- 10月11日 紅陵祭準備
- 10月14日 紅陵祭にて短編ドキュメンタリー上映(視聴者数10名、アンケート回答数5名)
- 10月25日 BFCプロジェクト(※)認証ラベル紹介動画の撮影
- 11月15日 石川一喜ゼミナール公式Instagramにて動画配信予定

活動の目的と目標

1.背景

ゼミナール活動の一環で参加した八王子市にある子ども食堂カフェ北野の朝食ボランティアを通じて実感した①フードロスと②コロナ禍における異文化交流機会減少の2つの課題に向き合うプロジェクトを企画しました。

2.目的と目標

食堂スタッフの方は子どもたちが社会問題や多様性を学び、主体性や自立心の育成を望んでいます。一方、留学生が多く在籍し、かつ同市に位置する拓殖大学の学生は、日頃から社会の持続可能性を研究テーマとする学生を擁しています。本プロジェクトでは、子どもたちに食のボーダーレス化へのアプローチを考え、3歳~12歳の子どもたち(目標15名)を対象に、食への感謝・食の多様性・食の地産地消の3つを理解してもらうことを目的として、異文化交流を取り入れた食育イベントを実施。そして活動の様子の撮影と、食堂関係者にインタビューを行い、短編ドキュメンタリーの作成とSNSにおける情報発信を行います。

食という一つのテーマをより多角的に捉え、現代社会における様々な問題や異文化理解に繋げ、活動を通じた時のボーダーレス・食のボーダーレス・生産者と消費者のボーダーレス実現によって、環境のボーダーレスの達成を目標に掲げました。



朝日教育会議



玉ねぎの寄付

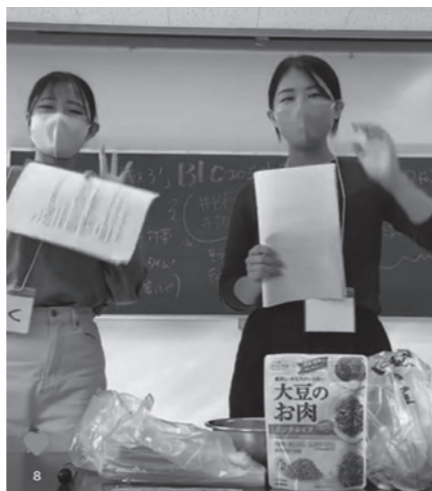
活動実績の報告

1.食育インスタライブ配信

はじめに、SNSから始める食のボーダーレス化の実現を目的として、子ども食堂イベントのリハーサルも兼ねた食育インスタライブ配信を拓殖大学の学生・他大学の学生を対象に約50分間のインスタライブを実施。視聴回数は、10月30日(日)時点で73回と多くの方が閲覧してくれました。インスタライブでは、フードロス問題について考えてもらえるよう、有用性の高い大豆ミートを使用した餃子を作ってその魅力を伝え、これからの時代の日常的な食材として取り入れてもらうことを目的に配信しました。また人参の皮を利用したチヂミのレシピも紹介。フードロス対策への具体的なアプローチも図りました。

2.子ども食堂での食育イベント

イベントでは、留学生のチームメンバーより大豆ミートを使用した中国風の餃子づくりと中国の文化を紹介しました。食の多面的なボーダーレスを実現するために、「伝え方」を工夫しました。伝え方で重要視したのは「子どもの立場に寄り添ったワークショップの運営」です。イベント前のミーティングで、「小学生の子どもたちに一方的に伝え、特に環境問題に関してずっと聞かせるや彼らは飽きてしまうのではないかと?」「低学年の子どもたちには難しい」という懸念が生まれました。そこで、小学生の子どもたちでも知っている情報から初めにアプローチし、クイズや中国語での会話を通して子どもたちに飽きさせない工夫を考えました。その結果、中国と日本の違いから説明するのではなく、両国の共通点から知ってもらうように投げかけ、大豆ミートに関して子どもたちにとってのメリットを教え、説明する際はイラストを多く使用することにしました。また興味を持ってインプットとアウトプットをしてもらえるように、クイズでは「覚えられたらお菓子をプレゼント!」というアプローチの仕方に換え、楽しく学べるように心がけました。



インスタライブ配信

企画概要

八王子市にある子ども食堂カフェ北野にて、3歳~12歳の子どもたちを対象に、食への感謝・食の多様性・食の地産地消の3つのボーダーレスの理解を目的に、食育イベントを実施。中国の留学生メンバーによる大豆ミートを使用した餃子づくりを行い、食文化と大豆ミートが持つ環境問題解決の可能性を子どもたちに伝えた。これらの活動を短編ドキュメンタリーにまとめ、紅陵祭で上映。孤食などのセーフネットとしても機能する子ども食堂の存在価値についても発信した。

※BFC(Borderless Food Culture):フードロスや食の多様性理解を目的としているプロジェクト。



子ども食堂イベント授業の様子(留学生)



道の駅 八王子滝山にて八王子産の野菜購入

3.アウトプット

次に私たちは、子どもイベント実施までに得た気づきや学びを、朝日新聞社と拓殖大学が共催するフォーラム「朝日教育会議」で発表しました。私たちが子どもたちへのアプローチで工夫したポイントを中心に、観覧いただく多くの方に伝え、中には私たちのプレゼンに対する評価やフィードバックをしてくださる方もおり、非常に学びの多い機会となりました。

4.反省点

活動の反省点は主に2つあります。1つ目は、子ども食堂イベントを一度しか実施できなかったことです。8月と9月にイベントを計3回実施予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、やむを得ず2回のイベントを中止し10月に延期開催しました。2つ目は、子ども食堂イベント実現に向けての準備不足があったことです。新型コロナウイルスの影響に伴い、対面で集まって運営することが難しくなり、一部のメンバーに負担が偏ってしまうような仕事配分や、子ども食堂側とのイベントの日程調整や、当日の授業の準備、紅陵祭で上映するドキュメンタリー制作などが期限間際になってしまっていました。

2回のイベント中止に対して、コロナ禍でも何かできることがないかと模索した結果「BFCプロジェクト」というものを新たに立ち上げて実施することにしました。これは、(※)ボーダーレスフードカルチャーの略で本企画のもう一つの目的であった食のボーダーレスを拓殖大学の学生間を越えて世界に発信し、実現するというものでした。こちらに関しては、実施中で「食で変えられる環境問題や社会問題、認証ラベルについて」動画で配信予定です。動画配信は、これまで関わりが少なかったメンバーにも携わってもらい、2つの反省点の改善に向けて動き出しています。

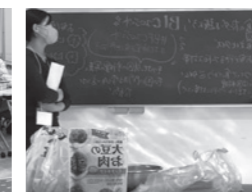
活動成果

先述の通り、子ども食堂でのイベントは1回限りとなりましたが、イベントには12名の子どもたちが参加してくれました。集客面での目標達成はできませんでしたが、餃子作りを楽しんでもらうことができました。環境問題や中国語に関するクイズも多く子どもたちが正解し、留学生とも仲良くなっていく様子を見ると、国境のボーダーレス、時のボーダーレスは実現できたと思います。クイズでは子どもたちが自主的に手を挙げて発言していて、主体性、自立性を促すことに貢献できたのではないかと考えており、社会人基礎力の「働きかけ力」は特に身につきました。しかし、3つ目の消費者と生産者のボーダーレスを目的とした活動に関しては、八王子産の玉ねぎの寄付や道の駅八王子滝山で販売されていた八王子市の生産者が作られた野菜も使用したものの、地産地消の背景にある環境問題や社会問題をうまく伝えるようにアプローチできなかつたと感じております。

活動を通して、子どもたちは私たちが思うより、未熟ではないと感じました。子ども目線に立ったワークショップを計画しましたが、実際には大豆ミートについて沢山学んでおり、主体的に活動に取り組んでいました。スタッフの方が、「子どもたちは少し難しいことの方が興味を持って取り組むし、本来みんな



BFCプロジェクト動画撮影



BFCプロジェクトインスタライブ配信

学びたい!という気持ちがある」と教えてくださり、少し難しいクイズや餃子の包み方も楽しんでくれていた子どもが多いことが分かりました。

中でも、スタッフの方へのインタビューで私たちの考える子ども食堂への固定観念への気づきは大きな収穫でした。子ども食堂に対して「貧困」などのイメージが連想されることがありますが、この食堂は「子どもたちの居場所」として地域交流の重要な役割を担っています。「こども食堂=貧困」と連想されることで、利用しづらい家庭が増えることもあるため、活動には十分に注意しながら発信する必要があると感じました。少ないメディアで得た情報や固定観念など、私たちの心の中には、自分では意識してなくても社会に対する見えないボーダーがあるのではないかと確認することが大切であると思いました。

インタビュー質問内容

- 【これまでについて】◎これまでどんなイベントを実施したか。どんなイベントが子どもに人気か。◎活動の中で大きな変化を感じた出来事や印象に残っていること。◎なぜ子ども食堂に携わろうと思ったのか。活動を始めたきっかけ。◎やりがいを感じる時はどんな時か。◎コロナ禍ではどのようなイベントを実施したか?工夫点など。
- 【現在について】◎毎週どのくらいの人が子ども食堂を利用するか。どんな年齢層の人が来るか。◎子ども食堂はどのような場所か。◎今、感じている課題。◎今、学生達に伝えたいこと。
- 【これからについて】◎どんな社会にならなりたいと思うか? ◎子ども食堂の今後の展望や目標

インタビューキーワード

- ◎子ども食堂=貧困ではない。◎心へのアプローチ、心に幸せを届ける。◎コロナの現状よりも心の健康のほうが深刻な問題。◎子どもを「地域で」育てたい。地域の役割の重要性。◎本来子ども達は学びたいという意欲が誰にでもある。◎成績や勉強で判断されない価値観の多様性を提供する。◎学力以外の物差しを作る。◎子どもは簡単なものよりも、少し難しいものに関心がある。◎発展よりも継続することの重要性。◎大学生の役割 子どもに違う価値観を与えられる。

会計報告

活動資金 27,610円		支出総額 26,711円	
内訳			
項目		小計	
子ども食堂カフェ北野交通費		4,230円	
子ども食堂イベントレシピ 授業資料印刷費		480円	
イベント消耗品費		1,870円	
紅陵祭ブース用消耗品費		440円	
リハーサル・イベント当日食品		7,149円	
リハーサル用キッチンスペースレンタル		2,000円	
認証ラベル動画作成用 食品代		10,542円	
合計		26,711円	

▶ ホームページ掲載

- ◎実施企画書 <http://gakuchalle.takushoku-u.ac.jp/2022/kikakusho.html>
- ◎学チャレレポート <http://gakuchalle.takushoku-u.ac.jp/2022/repo3.html>



子ども食堂イベント授業の様子



子ども食堂イベント授業の様子(餃子づくり)



留学生サポートプロジェクト

【団体名】 国際防災支援チーム

【代表者】 外国語学部 国際日本語学科 3年 山岸 友真

活動記録

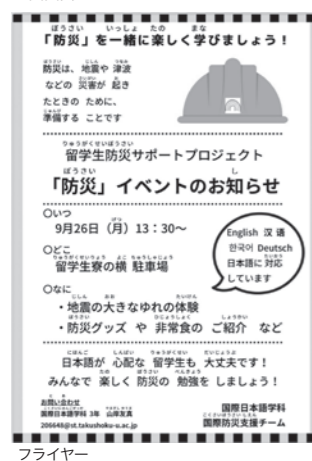
- 6月30日 交流会準備打ち合わせ
- 7月4-5日 非常食、防災グッズ、ボードゲーム(一種類目:「シャッフル+」)準備
- 7月7日 交流会実施(防災を学べるボードゲーム、スライドを用いたレクチャー、防災グッズ・非常食の紹介など)
- 7月21日 動画撮影準備開始
- 8月6-7日 オープンキャンパスに出展
- 8月8日 学内で、YouTube用の動画を撮影(3本分) (①「防災リュック」の紹介 ②手軽に手に入る防災グッズの紹介 ③団体紹介)
- 8月9日 八王子市役所防災課へ起震車借用手配
- 8月9日 メンバー自宅にて、YouTube用の動画を撮影(2本分) (①非常食の試食 ②地域の危険箇所を紹介)
- 8月22日 動画編集作業開始
- 9月22日 防災イベント最終打ち合わせ
- 9月26日 防災イベント実施(起震車を用いた地震体験、防災グッズ・非常食の展示、クイズやアンケートを通じた防災に関する知識の発信)
- 10月6日 紅陵祭準備開始
- 10月4-16日 紅陵祭出展



交流会でメンバーと参加者が机を囲み、ゲームから防災や非常時の動きを学んでいる様子



動画画面



フライヤー

活動の目的と目標

大災害発生の危険性が叫ばれる今日、我々は外国人生活者の災害への意識や知識が足りないのではないかと考えます。これは、有事の際に生死に関わる大問題に発展する可能性があります。

この問題意識のもと、災害時、国籍や言語の違いによって、生死や安全面のボーダーを生まないために、日本人学生と留学生が協働学習を行う拓殖大学の学生として、まずは学内でできることとして以下の活動を行いました。

1.留学生を主の対象とした交流会の実施

防災をテーマに、ボードゲームや座談会を開催し、平時からの繋がりを作りつつ、留学生の防災意識向上や知識の発信を目的に実施しました。各回15名の留学生の参加を目標としました。

2.防災イベントの開催

八王子市から起震車を借用し、地震体験を行うことで、防災の必要性を身近に感じてもらうことを目的としています。50名の来場を目標に、地震体験および防災グッズの展示や防災に関するクイズ等を実施しました。

3.動画作成

「防災のしかた」や発生時の初動など、知識の発信を目的とし、動画を作成しました。留学生にも見てもらいやすい内容にし、YouTubeチャンネルの開設と、10本の動画投稿、200回の総再生回数を目標としました。



防災イベントで用いた、地震を体験できる起震車「グラットくん」

アンケート画面



メンバーから参加者へ、非常食や防災グッズをレクチャー



防災イベントに参加した方に、起震車を体験

企画概要

災害時に国籍や言語の違いによって、生死や安全面のボーダーラインが生まれにくいよう、留学生の防災意識の啓蒙や知識のサポートとして、防災イベントの開催及び動画制作を行った。防災イベントでは防災グッズの使い方を説明したり、ボードゲームを使って楽しく防災知識を学んでもらえるようにした。また学内での起震車体験も実施。動画では非常食の説明や避難所経路で気を付けるべき点などを解説した。引き続き、活動期間内に完成できなかった他言語字幕版を制作する。

活動実績の報告

1.交流会

7月7日(木)に、八王子国際キャンパスにて留学生を対象とした交流会を実施しました。スライドでの発表、防災が題材のボードゲームの実施、防災グッズや非常食の紹介を行いました。複数回の予定でしたが、夏季休暇と防災イベントの兼ね合いから、1回の開催のみとなりました。その代案として、8月6日(土)・7日(日)のオープンキャンパスにて、国際日本語学科ブースをお借りして展示を行い、高校生や保護者、留学生の方に防災を知ってもらい機会となりました。

課題 交流会を実施するための場所や時間の調整が難しく、学内への連絡が遅れてしまいました。日程調整において、夏季休暇中の予定のすり合わせや、募集の見通しが不十分であったため、1回の実施となりました。

改善点 参加者数が見込まなかったことから、国際日本語学科の先生方にご協力いただき、フライヤーを掲出して宣伝しました。

2.防災イベント

7月上旬より八王子市役所防災課と起震車借用の相談を進めました。9月中旬から、大学の担当部署との物品借用や実施場所等の協力を頂き、9月26日(月)に実施しました。参加者には、起震車の体験や非常食、クイズの挑戦を楽しみつつも、大地震の危険性や防災の大切さを自分事として学んでもらえました。

課題 起震車の入構や物品借用など、大学と調整すべきことより先に起震車の手配を行ってしまいました。それにより、関係部署に直前の対応・調整を強いてしまいました。また、夏季休暇明けすぐの実施となることから、学生への宣伝方法に限られ参加者募集に難航しました。

改善点 大学側との調整について、関係部署の方々に迅速に対応いただき、実施場所の確保や備品の手配などを遅滞なく完了しました。

また、大学ポータルサイトへの掲出と学内放送での宣伝協力のおかげで、43名の学生に来てもらうことができました。提供いただいた大学の非常食配布、学生寮などへ連絡いただけたことも成功要因の一つです。

3.動画作成

7月中旬から内容の検討を始めました。食事を伴うため、感染症対策として夏季休暇中にメンバーの自宅と学内に分けて撮影しました。その後、国際学部の学生に編集を依頼し、同時にメンバーでも編集を始めました。10月14日(金)~16日(日)の紅陵祭にて動画を放映しました。なお、留学生が対象であることから、字幕の多言語化の準備をしており、引き続き投稿をしていく予定です。

課題 動画をどのように編集するか苦戦しましたが、当初はアウトソーシングすることも計画していましたが、予算の見積もりが甘く厳しいということが分かりました。また、動画の撮影やその準備に想定よりも時間がかかり、予定より動画本数を減らすことになりました。

改善点 動画編集については、メンバーで行いつつ、学外で入賞経験のある学生にも協力を依頼して作業を行うことができました。また投稿については、続けて実施します。

動画はコチラ

YouTube@zeminakamura



4.企画全体を通して

もともと計画していた以下の事項は、活動を行うことができませんでした。原因として、計画を詰めすぎたこと、夏季休暇中の活動内容が甘かったこと、チーム内の連携不足が挙げられます。

- ・他大との「防災」を通じた交流や連携
- ・防災施設への見学

実施企画については、日本人学生と留学生が一緒になって参加し、工夫することで、防災の知識と意識の向上につなげられたと考えています。また、紅陵祭への出展等も含め、学内の交流的観点も含めて活動することができました。



防災についての発表や説明



メンバーと参加者が消火器の使い方などの知識を楽しく学んでいる様子

活動成果

留学生に防災の知識を身につけてもらい、防災意識を向上させるという私たちの目的は、交流会や防災イベントを通して、留学生でも手軽に手に入れられる防災グッズ・非常食を紹介したり、クイズやゲームを実施したりすることで達成してきたと考えます。

1.目標数値の達成度

交流会

目標値:一回につき15名、複数回実施

結果数値:6名、一回実施

防災イベント

目標値:50名

結果数値:43名、うち留学生12名

(「防災クイズ」回答数)

YouTube 撮影のみ完了し、5本投稿。



紅陵祭では、自分たちでポスターを作成し展示をした



防災イベントで展示した防災グッズの一部

2.活動を通じた気づきや意義

留学生の防災意識は思っていたよりも低く、その原因には言語の壁や文化の違いが大きくあることを強く認識しました。また、日本人でも防災意識が低く、知識が足りない人が多く、日本人の理解度の低さが、外国人とのボーダーにつながる原因の一つとなっているのではないかと気が付きました。この知見は、異文化理解を学ぶ学生として、今後につなげていけるものだと考えています。

また、たくさんの方に自分の意思を伝えるためには、多くの壁を乗り越える必要があり、そのためには様々な工夫や努力が必要であることを学びました。

3.貢献できたこと

この活動を通し、拓殖大学の留学生や日本人学生に対して、防災について考える機会を提供することができたと考えています。参加いただいた学生のみならず、活動を知ってもらえた留学生には防災の意識を持ってもらえたものと思っています。それは日本人学生も同様で、拓殖大学のボーダーレス化の一助となることのできたのではないのでしょうか。

4.活動を通して身についた力

この活動を通し、課題を見い出して解決に向け、分析する力が身についたと考えます。社会の中にある身近な問題には、どのような課題や原因があるのかを分析することで、解決に向け行動することを学びました。この課題解決に向かう行動力は、学生チャレンジ企画として大きなプロジェクトを経験したからこそ得られたものであると思います。

会計報告

活動資金	121,000円	支出総額	35,559円
内訳	項目	小計	
	① 展示用防災グッズ	14,097円	
	② 災害備蓄品	8,936円	
	③ 消耗品	2,660円	
	④ 防災学ぶゲーム用品(シャッフルプラス、INCASE)	9,866円	
	合計	35,559円	

▶ ホームページ掲載

○実施企画書 <http://gakuchalle.takushoku-u.ac.jp/2022/kikakusho.html>

○学チャレレポート <http://gakuchalle.takushoku-u.ac.jp/2022/repo4.html>



成果報告発表会

採択団体による成果報告発表会を開催。各賞が決定。

12月10日(土)、文京キャンパスにて今年度の活動の集大成として活動の成果を報告しました。各団体の発表後に、実行委員会を開催。最終結果が決定しました。



多文化交流プロジェクト (MEP x SDGs)



オーシャン ガーディアンズ



C3F (サークルスリーエフ)



CGRG (Culture Gap Research Group)



拓SHOKU堂 2022



国際防災 支援チーム

講評 潜道 文子 学生チャレンジ企画実行委員長(拓殖大学副学長/商学部 教授)

どのチームも本当に甲乙つけがたい素晴らしい発表だったと思います。授業や就職活動、インターンシップなど時間の制約がある中、調整しながら限られた時間で学生チャレンジ企画の活動を行い、皆さんがすごく成長した姿を見せてくれました。この経験がこれからの皆さんの財産になると考えると、とても嬉しく思っています。



多文化交流プロジェクト (MEP x SDGs) ボーダレスかるた交流!!

講評 潜道実行委員長

かるたを自分たちで制作し、その成果が目に見えるかたちで完成された点がとても良かったと思います。かるたの仕上がりについて予想以上に良かったというのが審査員の方々の印象でした。素材もエコなものを使用し、SDGsに沿った制作をしている点も高評価でした。このチームは、研究会の仲間と構成されていて、本当に学生の皆さん一人ひとりが自発的に動いてプロジェクトをやってきたという特徴があります。たくさんの人を巻き込んで進めた紅陵祭のかるた大会のにぎわいは、非常に目立った存在で、拓殖大学の子学生の力というのが非常に感じられるプロジェクトでした。本当におめでとうございます。

代表挨拶 商学部 国際ビジネス学科 2年 浅川 愛梨
受賞できたのは、たくさんの方々のさまざまなサポートがあったからだと思います。そしてなにより一緒に活動してくれたメンバーに感謝しています。引き続きこれからも頑張っていきたいと思っています。ありがとうございました。

受賞の感想(メンバーの声)

- 自分たちが今まで5か月に渡って頑張ってきて、何もかも初めての挑戦でしたがこのような成果を残せて嬉しいです。
- とても嬉しくて涙が出ちゃいました。些細なことからはじめようと思っていたことが、大きな成果につながりました。大変なこともあったけど乗り越えられたので、とても成長できたと思っています。大賞を受賞したことでさらに実感しました。

みなさんにとって学チャレとは?

- とても成長できた場だったと思います。始めたときは全然未熟でも何もできませんでしたが、絶対に成功させる!という強い想いからとても精神的に成長できました。
- 自分がチャレンジしたいことができる場。夢を叶える場所です。



拓SHOKU堂 2022 拓こう!繋こう!食の未来! サマースクールin子ども食堂

講評 潜道実行委員長

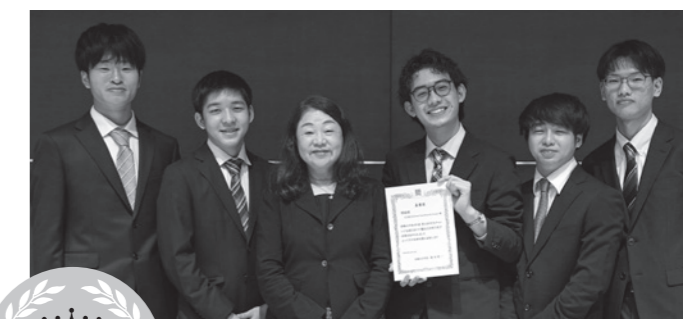
学内だけでなく、社会と関わるより大きな企画ということで、自分たちが感じている課題をなんとかして伝えていきたい想いが非常に伝わったと思います。また、新しい子ども食堂の在り方を見せてもらえたような、それを示唆して何か光が見えるとても気持ちの良いプロジェクトでした。さらに、ボーダレスが今回の学生チャレンジ企画のテーマですが、このチームが一番ボーダレスというものを意識していた点も非常に高く評価されました。

受賞の感想(メンバーの声)

- みんなで一緒に頑張って本当によかったです。
- 素晴らしい人生の経験です。この活動をきっかけに動画作成を真面目に勉強することができました。
- コロナウイルスの影響でいろいろ大変なこともありましたが、こうして賞をいただき、形に残ってよかったです。

みなさんにとって学チャレとは?

- 学生が自分で主体的に行動するのをサポートしてくれる有意義な場所だと思っています。
- 自分が思っている能力以上のことができる場所
- 「学外へ発信する力」と「たくさんの方々の協力を得るための力」がつく企画



奨励賞 CGRG (Culture Gap Research Group) 脱!カルチャーギャップ! ~国際キャンパス1年生の挑戦~

講評 潜道実行委員長

1年生でこれだけの活動を行ったことが素晴らしい、今後の期待も含めて評価が高かったです。5つの地域愛好会と3つの学チャレの団体にも声をかけて人々を巻き込んだ力と、非常に誠意をもって行ったプロジェクトだということがとても感じられました。さらにパンフレットを作ることでその成果が見える形で出てきたのも素晴らしいことでした。まだ1年生ですので今後も頑張っていたきたいと思います。

受賞の感想(メンバーの声)

- 1年生ながらもこのような賞をいただき、成果が得られとても嬉しいです。ずっと継続して活動をしてきてよかったです。
- いろいろと頑張ってきたことが形として認められ、とても嬉しく思います。
- 活動してきて上手いかわからないこともありましたが、こうやって成果報告発表ができてよかったです。
- 活動初期では考えられないくらいに仕上がりが、最終的にパンフレットという形一つにまとめることができ、自分たちの目標が達成できたのでとてもよかったです。
- メンバーの中で唯一の留学生として参加しました。メンバーの皆が支えてくれて活動できました。感謝します。

みなさんにとって学チャレとは?

- 自分の中にあるやりたいことを言語化して、伝えることができ、自分を成長させる場です。
- 文字通りチャレンジ!挑戦の場です。異文化交流について細かいところまでいろいろと考えるきっかけになり、考えを深めることができました。
- 学チャレは一から自分たちで頑張って作っていく良い経験になる企画です。とても楽しく活動できるものだと思います。
- チーム一丸となって活動をする楽しさと大変さを実感できるいい機会。
- 自ら考えて動くことが経験できる企画